
心の色

トワイライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の色

【Nコード】

N6950E

【作者名】

トワイライト

【あらすじ】

親友とは、友達を作るとは、一人ぼっちとは、愛情とは。折り鶴が叶える願いにより露になる人の心。あなたはとうですか？

第一章 イナビィ 第二話（前書き）

この作品は、私の考えなので実際は違うと思います。だけど、一度は思ったことが、一度は見たことがあるかもしれない。嫌悪感がでたらすみません。

第一章 イナビィ 第二話

(なんだあれ?)

俺は授業中に白い折り鶴を見つけた。

その時、興味本意で拾った俺であったが後悔はしていない。それは今でも。

俺は今年、坂ノ上高校に入学した藤堂。特に他人と変わらない高校一年生。

今は、さっき理科室で拾った白い折り鶴を崩れない様に解体しているところだ。授業中に解体しようとしたが、視線を感じて止めた。授業が終わってもしばらく続いたが、今はそんな感じはしないので、放課後始めたってわけだ。

「な〜にやってんだ藤堂？」

話しかけてきたヤツは俺の親友の野沢。コイツは中学の時、一年と二年の時一緒だったが、三年の時クラスが分かれてしまったヤツだ。

今もクラスは別々だ。

「今日の授業の時な、白い折り鶴を拾ったんだ。そして、なんか気になるから解体してるってわけだ」

俺は折り鶴を見せながら説明した。
すると、野沢が驚いた顔にして

「あ、お前も落ちているやつ拾ったんだ。オレも拾ったぜ」

ほら、と言いながらポケットの中から折り鶴を取り出した。
多少クシャクシャになっていたが、俺と同じ様に白かった。

「お前なんで拾ったんだ？」

野沢が聞いてきた。

「なんとなくだ。お前だって、教室とかに落ちているペンや消ゴム拾うだろ？それと同じだ。お前こそなんでだ？」

「オレも拾ったんだ。なんか作り方上手だし、形も綺麗だからな」

そう、これはとても綺麗に作ってある。小学生が遊びで作る様な形ではない。折り目もきつちりとしており、翼も広がる様になっている。なんだか、想いが込められながら作られたって感じがする作りだ。

「そのわりには扱い方がひどいな」

「う、別にいいじゃねーか。気に入ってるから。それより岩崎とはどうなったんだよ。ちゃんと遊んでるか？彼女なんだからさ」野沢

が話題を変えてきた。

野沢の言う通り、岩崎は俺の彼女だ。中学の時、俺は彼女に憧れていた。純粹に可愛かったからだ。三年の時、野沢と入れ違いで同じクラスになった時は、嬉しかった。

それどころか、運良く仲良くなってしまった。野沢に相談したりして、アピールしてきた。

そして、卒業してからのクラス会で告白しようと決心していたが、なんと、彼女の方から告白してきた。

俺は即答して、楽しい日が続いているということだ。

時々、同じ中学の友達達（野沢をふくむ）が冷やかしてくるが、男の友情は変わらなかった。

「ああ、ちゃんとデートしてるぜ。一緒に登下校もしてるしな」

「いいなあ、デート。オレもしたいぜ。」

このあと、俺は折り鶴の解体を忘れ、野沢に彼女自慢をしていた。彼女の嫌いな食べ物、好きな映画のジャンルや本。いろいろ喋っていた。ただの嫌味だろうに、野沢は熱心に聞いてくれていたことが嬉しかった。さすが親友だ。

一通り話したあと、俺は話すのもそこに折り鶴の解体を再開した。破ることもつたない気がするので慎重に。

ただの折り紙になったところ裏返ししてみると文が書いてあった。

「なんだこれ？それにこの文。イタズラか？」

「知らね。もしかしてオレのもあるんじゃない？」

と言って、野沢も解体し始めた。

偶然か必然か、俺のヤツとまったく同じ文が書いてあった。

『この折り鶴を拾った人は願いを叶えてあげます。もし叶えてもらいたいならば、夜、学校の屋上に来てください』

第二話

俺達は顔を見合わせていた。

野沢が質問してきた。

「どういう意味だ？」

「そりゃあ、『願いを叶えてやるから、夜、学校に来い』ってことだろ」

「そんなことわかつとるわ。なんで夜の学校なんだ？別に今だっていいじゃんか」

野沢が真剣に答えてきた。俺はその時は全然信じていなかった。

「お前、本当に願いを叶えてくれると思ってんのか？マンガじゃあるまいし」

「お前は信じていないのか？」

何時になく真剣な顔をしている野沢。

俺はため息をついて

「あんな野沢。この現実世界に願いを叶えてくれるヤツはいないだろ。『ゲーム機が欲しい』とか『新しい家が欲しい』だったら叶えてくれるヤツはいるかもしれないが、『原始時代にタイムスリップさせて』とか『透視能力を下さい』を叶えられるヤツはいるはずないだろ」

「それじゃあ、この折り鶴は？」

「イタズラ。しかも精巧に作られているからよっぽど暇人だな」
俺は正論を言った。始めは、この文章と野沢が持っていたことで驚いたが、真面目に考えるイタズラだと思うだろう。

野沢はしばらく考えていた。そんなに考えなくてもイタズラって気付くだろうに。

あまりにも野沢がダンマリしていたので、俺は折り鶴を元に戻すことにした。

俺のヤツを元に戻し、野沢のヤツのも直そうと取ってみると、薄く、それこそ目を凝らさないと気付かないほど薄くピンク色をしていた。俺は不思議に思った。

確か、初めて見た時は真っ白だったと思う。俺のヤツと隣会わせても区別がつかなかったからだ。

だけど、今、隣会わせてみると区別がつけれる。さすがに純白と隣会わせたらピンク色が目立つ。

まあ、俺が気付かなかったただけだろうと思いそれ以上考えることはなかった。

野沢の折り鶴も戻した俺は時計を見た。もう大分時間がたっていたので野沢に帰宅を申し出た。

「おい、帰ろうぜ。腹も減ったしさ」

「ああ」

はっきりしない返事が返ってきた。

帰り道

「やっぱり願い叶えてもらいに行こうぜ」

「はぁ？」

野沢が急に切り出した。

「なんでだよ。嘘に決まってるだろ」

「なんで嘘って決めつけるんだよ。本当だったらどうすんだよ。お前が変わりに叶えてくれるのかよ」

野沢はちよつと怒った感じになった。

「ああ、お前には岩崎っていう彼女がいるもんな。そりゃあ願いなんでないよな。でも、オレにはあるんだ。もしかしたらっていうことがあるかもしれない。だから行くんだ」

正気か？と思いつつも、しょうがない、という気持ちになった。

「しょうがねえ、俺も行くよ」

「無理して行く必要ないぞ。お前、岩崎とか忙しいだろ」

「なんで、そこでアイツがでくんだよ。まあ、正直言うと俺にも叶えてもらいたい願があるからな。だから俺も行きたい」
嘘だった。本当はコイツと仲が悪くなりたくないからだ。

「そ、そうか。さすが我が親友だ。じゃあ、今日の八時。校門でな」

「なんで今日なんだよ。日時は書いて無いだろ」

「お前、クリスマスプレゼントを買って貰うのを我慢出来たか？」

「無理だな。わかったよ、今日の八時にだな」

「そういうこと！」

「でも何時に叶えてくれるんだ？指定がないからもしかしたらずっと待たなきゃいけないぜ」

「待ちゃーいいじゃん」

「へいへい」

決まってしまった。が、一夜犠牲にするだけで親友を貰き通せるなら安いもんだ……安いのか？

その時俺のケータイがバイブした。メールのようだ。送信者は岩崎。内容を見ると……

「わりい。一人で帰ってくれ」

「岩崎か？」

「ああ。『一緒に帰ろ!』だってさ」

「ああ青春。眩しすぎて直視出来ねえ」

「それじゃ、そういうことで！」

俺は野沢の言葉をスルーして学校に戻った。

一人になった野沢は黙々と帰っていった。

その時、野沢が持っている折り鶴は薄いピンク色ではなくしつかりとしたピンク色に変わっていた。無論、藤堂は知らなかった。野沢も気付いてはいなかった。

「ごめん、待った？」

俺は校門で待っている岩崎を見つけるとそういった。

「ううん。それより、私が電話したの気付いてなかったの？」

そういえば、と思い、メールの確認をする時に着信アリの知らせがあったのを思いだしチェックしてみた。その相手はもちろん岩崎。時間は放課後になってすぐだった。

「ごめん。本当に気が付かなかった。」

「いいよ、いいよ。私だって気付かない時だってあるしね！」

「サンキュ。んじゃ、帰るか！」

「うん！」

こうして俺達は帰り始めた。

途中、俺は今日部活が中止で岩崎が部活をせず、俺と一緒に帰ろうと電話し、かからなかったから俺のために二時間待っていることに気が付いた。

このことを岩崎に話すと

「そんなことより、藤堂君が私と一緒に帰るために戻ってきてくれたことの方が凄かったよ！」
と言ってくれた。

「それじゃあまた明日ね、藤堂君！」

「明日は部活頑張れよ！」

俺は彼女を家まで送り帰路についた。

家に着き準備をしながら呟いた。
「これから、夜の学校探検か」

第三話

学校の裏門

時刻は八時

俺達は学ランに身をつつんでいた。もちろん、折り鶴はポケットに入れてきた。なんとなく。

「どうやって入るんだよ。門、しまってるぞ」

「登ればいい」

そう言って、野沢は門を登り始めた。

「はあ、来るんじゃないか」

「おい、早くしろ」

仕方なく俺も登った。そんなに高くはなかったからすぐに登れたが、登りきると、野沢はもうすでに校舎のすぐ近くに立っていた。

「んじゃ、屋上目指して頑張るか」

何だか、野沢の笑顔が何時もと違う。なんか、無くしていた物を、

ヒョンとしたことで見つけた顔。そんな感じだ。

「わかったよ。でもどうやって校舎に？」

俺は野沢に聞いた。

「窓から」

「あんな、野沢。学校って結構セキュリティは万全で、夜に窓を開けるとセンサーに引っ掛かるぞ。それに巡回の先生もいるはずだ。引っ掛かったり、見つかると停学じゃないのか？」

「マジ？」

「マジ」

俺はしゃべっていて、あわよくば中止になるかもしれないと思った。

「開いてるところ、探すぞ」

「へいへい」

開いているはずがない。そして今日は中止となり、もう来なくなる。それが俺の理想だが、なぜか、一ヶ所だけ開いていた。

「ラッキー！藤堂、ここから入るぞ」

「おい、ちょっと待て。見回りの先生はどうするんだよ」

「大丈夫、大丈夫。見付かないって」

俺の最後の希望も無くなり、結局、屋上に行くことになった。学校

は三階建て。

到着するまではもちろん野沢と会話をした。

「藤堂、お前はどんな願いを叶えてもらうんだ？」

野沢はマジメに聞いてきたが、俺はマジメに答える気はない。

「ま、願いがひとつしか叶えられないなら、『願いを百個叶えてください』だな」

「お前、まさか……」

「そうさ！マンガでこんな場面を見るといつも思うんだよな。こう願えとけばいっぱい叶えてもらえるのによ」

「お前ってヤツパリヤナ奴だ」

「だってよ、あのマンガでこう願っておけば、あんなに人死ななかつただろ？」

「確かにそうかもしれないけど、そうしたら感動がなくなるだろうが」

「人が死ぬことが感動だなんて……いつの時代の本だよ。こう願った時の、願いを叶えてくれる奴の顔が見てみたいぜ」

いないだろうけど。

「お前は『岩崎との仲がずっと続きます様に』とか願っておけ」

「面白い方がいいだろ？それより、お前はどんな願いを叶えてもらうんだ？」

「オレ？オレは………『チャンスをください』だ」

俺はそのセリフを聞いて、野沢のことを見直した。

さっきまでは、強制的に願いを叶えてもらう卑怯者と思っていたが、『チャンスをもろうだけ』だなんてカッコいい。あれだ。野球で例えると、『俺のバットにボールが当たれば全てホームランにしてくれ』ではなく、仲間に『俺まで打席を繋げてくれ』だ………わかりにくいな。あれだ、最終的には、自分の力で全てが決まるってわけだ。

まさに男だ。

「野沢、応援するぞ。願いが叶ったら、そのチャンス、絶対物にしろよ」

「もちろんだ。だけど、チャンスを物にしてもオレ達友達だよな？」

「もちろんだ」

野沢だったら願いに頼らなくても叶えられそうだ。野沢だって、キツカケが欲しかったのだろう。ふっきれるための。だからこんな非現実なことに頭を突っ込んだのだろう。

「さすがは親友！他人の幸福を妬まない！」

この関係は崩したくない。だからコイツに今日、付き合ったんだ。

いつのまにか、屋上に到着していた。

二人の深夜探検も終わりか………ま、友情が深まったからいいや。

「オープン！ザ・ドア！」

野沢が勢いよくドアを開けようとしたが

『ガッ』

開かなかった。

「どきたまえ野沢くん。私が、ドアを開けようじゃないか」

俺は鍵を開けて

「オープン！ザドア！」

ドアが開いた。

第四話

俺達は屋上にたどり着いた。星空満天で満月だ。ちょっと寒いけど、それらしいムードが出ていた。

当然のことながら、屋上には誰もいなかった。まあいるとしたら、巡回の先生だけだろうけど。

俺は呆然と立ち尽くしている野沢の肩に手を置き

「残念だったな。だけど、お前だったらこんなのに頼らなくてもキツト自分の力で……」

俺が野沢に慰めの言葉をかけている時、ポケットの中に入っている折り鶴が白く光りだした。

野沢の折り鶴も光りだした。だけど、その色は赤かった。

俺達はポケットから折り鶴を取り出した。俺のは白いままだが、野沢のは赤だった。

「お前のって、赤かったか？」

「白だったと思うが、そんなことよりこれで願いが叶うんじゃないのか？」

野沢は俺の質問を流した。無理もない。

今、ホントに非現実的なことが起こっており、折り鶴に書いてあった通りに、願いが叶うかもしれないからだ。

俺も信じなければならぬようだ。この現実を。

俺は、手の上ののっている折り鶴を見た。

白い輝いている――野沢のは赤く輝いているが――それは、紙全体

が光っているみたいだ。
折り鶴を解体してみた。

依然として紙は輝いているが、前に書いてあった『この折り鶴を拾った人は願いを叶えてあげます。もし叶えてもらいたいのならば、夜、学校の屋上に来てください』という文が無くなっていた。
その変わりに、『三つ願いを』という文に変わっていた。

「おい、見てみろよ。『願いをいえ』ってことだろ？これ」
俺は野沢に紙を見せながら言った。

すると、野沢は自分のを見ればいいものの、俺を取り上げてはしやぎはじめた。

「オレ達って選ばれたんだろーな！スゲェ！んじゃ、早速願いを……」

「ちょっと待て」

「なんだよ？」

「まず、俺から言ってみよう。ここまで手の凝んだイタズラはないだろうが、確かめるだけだ。」

「そう言って、岩崎との仲のことを願うんだろ？」

「ちげーよ。寒いからコートを俺とお前の分をだしてもらおうんだよ。しかも高級なヤツをな。これなら安全に調べれる」

そういうと俺は折り紙を握りしめて発声した。別に発声すれば叶うかどうかはわからないが。

「オレ達二人に高級ブランドのコートをくれ!!」

言い終わると、オレ達の背後で『ドサツ』という音が聞こえた。振り向いてみるとコートが二着おちていた。さっきの音はこれだろうな。

「スゲエ……本当に願いが叶うんだな……」

「女性ものの高級ブランドだけだな。さあ野沢、お前のぼんだ。チヤンスもらってこい。そして、最後はあの実験でいいな」

「ああ、オツケーだ。今日、付き合ってもらったしな。んじゃオレの願いは……」

野沢は一呼吸ついていた。

「藤堂と岩崎を別れさせて、岩崎の中学時代の藤堂に関する記憶を消してくれ」

俺の手からコートが落ちた、が折り紙はおちなかった。

第一章 envy 妬み（前書き）

ミスで丸ごと消えてしまったので、初めから書き直しました

第一章 envy 妬み

嘘だと言って欲しい。冗談だと言って欲しい。

だけど野沢ははっきりと言った。俺と岩崎を別れさせてくれ、と。

俺は野沢の胸ぐらを掴み怒鳴った。

「どういう意味だ！なぜ俺と岩崎を別れさせるんだ！俺に恨みでもあるのか！」

自分でもかなり怒っており、手に力が入っているのがわかった。だが、野沢の言ったセリフにより力が抜けた。

「オレも岩崎のこと、好きなんだ」

野沢の胸ぐらから俺の手が落ち、逆に野沢が俺の胸ぐらを掴んできた。

「お前にはわからないだろうーな！この数ヵ月間、オレがどんな気持ちで過ごしてきたか！お前はオレのことなんてこれっぽっちも考えなかっただろ！幸せ顔で岩崎のことを話して！」

確かに、俺は野沢のことは全然気にならなかった。気にかけていたなら彼女自慢なんかしなかっただろう。

「オレは考えた。何でオレじゃなくてお前なのかと。出した答えが『一緒に過ごして来た時間』だ。お前が中三の時、岩崎と一緒にクラスになったから『今』があるんだ。それがお前じゃなくオレだったら、二人とも違うクラスだったら『今』は違ってるはずだ。だからオレは願う。フェアにしてくれと」

確かに、俺が中三の時、偶然、岩崎と同じクラスになって、偶然、野沢と離れた。そして偶然、岩崎と仲良くなり、告白された。

もし俺じゃなくて野沢だったら、二人とも違うクラスだったら、今とは違う物語が語られている。

だけど、その物語はもう語られることはない。過ぎてしまったことだ。

だけど、野沢はこの非現実的な力を使って、違っていたかもしれない物語を高校から始めようとしている。

「この力によって全てが白紙になるはずだ。岩崎はまたお前を選ぶかもしれないし、オレかもしれない。他の男かもしれない。だが、誰を選んでも後悔はしない。フェアプレイで行われた結果だ。お前が選ばれたら、オレはお前の友達でいる。オレが選ばれたら友達でいてくれよ」

「……そんなのいいわけないだろ」
俺の腕に力が入るようになった。

「は？」

「そんなのいいわけないだろ！」
俺は再び野沢の胸ぐらを掴んだ。

「そんなのお前の勝手なワガママだろ！勝手に俺を嫉妬して、勝手に俺を妬みやがって。勝手にフェアプレイとかいいやがって。全然、フェアプレイじゃないだろーが！」

「なんだと？」

「大体、お前と俺は岩崎の好みとか知ってるだろ！そこでもうアド

バンテージがあるじゃねえか！他にも数えきれないほどある」

「はっ！そんなの調べればあつというまに調べれる。一緒に過ごした時間っていうアドバンテージと比べれば小さいことだ！」

俺は野沢を殴りたい衝動にかられた。だが、我慢した。ここでキレて殴ったら残る最後の願いで何を願うかわからない。

「ふん。岩崎と付き合わせくれているという願いじゃないだろ？オレはチャンスが欲しいだけなんだ。」

「なに偽善者ぶってんだよ。お前は正々堂々じゃないと戦えないのか？」

「なに？」

「お前は逆境から逃げ出しているただのチキンだ！腰拔だ！」

「なんだと！」

野沢は掴んでいた手を離し俺の顔を殴った。

俺も躊躇わず殴りかえした。今後のことなんかどうでもいい。俺は心底キレていた。

俺と野沢は一度もケンカしたことはなかった。きつかけも無かったし、したいとも思わなかった。

だが今思えば、もしかしたら野沢は四月あたりからずっとケンカしたかったかもしれない。

どれぐらい時間がたっただろうか。
俺達はまだ殴りあっていた。止めようとも思わなかった。止めたら、
負けの様な気がしたからだ。

ゴスッ

俺の拳が野沢の腹に食い込み、俺の方に倒れかかってきた。

「!お、おい!」

「くっ、だが……願いは………叶………ったはず……だ」
途絶え途絶え言いながら、完全に俺の方に倒れた。気を失ったみたいだ。

俺は野沢をゆっくりと地面に寝かせた。

その後、俺に今までの野沢ことについての罪悪感、そして今日のこ
とについての罪悪感が襲ってきた。

「なんでこんなことになったんだ?なんで俺、こんなことしたんだ

？第一、この折り鶴さえなければ……」

「それは違います」

背後から声が聞こえた。

「誰だ！」

後ろを振り向くととても質素な服装の女の子が立っていた。「あなたはこの折り鶴がなければ、今日の様なことは起きないと思いますたね。それは違います。今日のことは必ずいつか絶対に起こります」

「なんだと？」

「あの人とあなたは親友でしたね。だけどあの人はあなたに愛する人をとられ、妬んでいました。あなたがあの人のことを気にかけてない限りは、あの人の妬みは積み重なり、いつか爆発してしまいます」

そうだった。今日のことは俺が野沢のことを気になかったから起こったわけで、俺が自慢したり、岩崎と付き合っている限りは避けられない。

気にかける自信はない。うかれてもいたし、今日、初めて野沢が岩崎のことを好きということを知ったからだ。

「それにそれは今日より酷いかもしれません」

「そうだな。今日より嫉妬がたまるんだからな」

でも、今日起きたことが正解かどうかはわかるはずがない。もしかしたら、後の方が穏便に済ませるかもしれないからだ。

「あんたは今日起きて正解だったと思うか？」

俺が目の前の方のヤツに質問すると、怪訝な表情……いや、落胆した表情になって答えた。

「あなたは、遅くても速くても親友との仲が壊れるのを正解だと思うのですか？」

実に的をえた答え。俺はそんな答えは思い付いたりしなかった。

「自分の被害の度合いだけを考えるのなら、あの人とあなたは、そこまでの関係なのでしょう」

「そうかもな。俺達はそこまでの関係だったんだろうな」

季節は春なのに、冬の様な震えるような冷たい風が俺と野沢だけ吹いているようだった。

「今日のことはあんたの仕業なのか？」

「違います。私はずっと見ていただけです」

「この鶴は？」

「ご存知の通り、願いを叶えてくれるものです。ただ……他に副作用がありますけど」

「副作用？」

「あなたの今日の出来事を振り返ると分かると思います。」

今日の出来事を振り返ると分かる？ ちよっただけ考えてもわからない。ケンカ以外に何かあったか？

いや、後でじっくり考えた方が良さそう。

「なるほどな。あんたは傍観者ってわけなんだな」

「はい。そのような使命がありますから」

女の子が一瞬だけ気丈な表情になった気がした。

「俺、どうすれば良いんだ？」

俺は、解決策を模索した。このままだと、気まづいまままで過ごしてしまうからだ。それに、謝って済むことなんかじゃない。

「自分で考えたらどうですか？ 願いもあと二つあることですし」

「わかった」

俺は考えた。

一番いいのは、俺と岩崎が別れることなのだろう。そもその原因はそれだからだ。

だけど、岩崎と別れるのは嫌だ。せっかく好きな子と付き合えたのだから、幸せは失いたくない。

願いを使って、野沢の記憶を消したり、好きな子を変えたりするのはどうか。

いや、だめだ。それは、俺の独占欲が出ているだけだ。

俺は試行錯誤して、一つの解決策を見い出した。

「野沢の今日の記憶を消してくれ」

「私に言わないで下さい。私が叶えるわけではないですから」

そう言われ折り紙に祈った。

一瞬眩しく輝き、また元の輝きに戻った。

「願いは叶ったみたいです」

「そうか。野沢の最後の願いはやっぱり叶ったのか？」

女の子は首を横に振った。顔には少し軽蔑が感じられた。

「最後の一つはどうしますか？」

「勝手にしてくれ」

「そうですか。では、最後に言わせて下さい。」

女の子が一呼吸ついて話した。

「今日はありがとうございました。お陰で人間関係を知ることが出来ました」

ありがとうだと？

コイツ、人が傷付いて悲しんでいるのに喜んでいるのか？

俺はボロボロになっている体に鞭を打ち、女の子に殴りかかった。俺が、殴ることが出来なかった。避けたのではない。俺の拳が体をすり抜けたのだ。

「無駄ですよ。私、ここにいませんから」
無表情で言われた。

「人の不幸を見て喜ぶのかよ！最低だな！あんたにはわからないだろうな！こんな悲しい気持ち！」
俺はわめいた。そうでもないかと、どうかなりそうだからだ。

「勝手なこと言わないで！！あなただって私の気持ちはわからないでしょ！私がどんなことを経験して悲しいか！」
女の子が初めて確りと感情を表した。
それは完全な怒り。

俺は恐縮し言い返すことが出来なかった。

「す、すいません。軽率でした。今後は気を付けたいと思います。
では、さようなら」
表情が元に戻ったかと思うと、女の子はスゥーと逃げる様に消えていった。

「最後の一つは無かったことにします」
それが消えていく間、最後に聞いた台詞だった。

女の子が消えた後、しばらくすると野沢が起きた。
記憶がちゃんと消えているか心配だ。

「……うーん、あれ？何でこんなどこにいるんだオレ？
ちゃんと消えているようだ。」

「あ、藤堂！何でそんなボロボロなんだ？あれ？オレもだ！何でだ
？」

「そんなこと気にするな。俺だって今気付いたんだから」

「オレ達、宇宙人にアブダクションされたんじゃないかね？」

「そうかもな。さっさと帰ろうぜ」

そうして、俺達は自宅に戻った。

途中、今日のことの発端の折り紙をビリビリに破いて捨てた。

野沢の折り紙はあの燃えるような赤色ではなく、薄いピンク色だった。

俺のはというと………白から薄い水色に染まっていた。

その後、俺は野沢の本心を知ってしまったので前の様に気軽に話せなくなった。

野沢の方はというと、初めの方は俺のヨソヨソしい態度に不思議がっていたようだが、本心では俺に嫉妬しているので次第に話さなくなった。

二人とも他人行儀になってしまい、一学期が終わる頃にはまったく関わりを持たなくなった。

俺と野沢は赤の他人。親友でも友達でもない。ただ、同じ年度に産まれた人。知らない人

そのため、野沢の妬みの爆発の危険がなくなったようだ。知らない人を妬んでケンカを売るわけないだろう。

結果としては、良かったのか、悪かったのかは分からない。

だが、俺は後悔していない。後悔してないから、俺は今も岩崎と付き合っている。

「妬みの炎は赤く燃え上がる。人は何かしら友達の何かを妬んで
いる。わかった？鶴」

女の子が折り鶴に向かって話しかけている。その色は白。

「あの男の子はちょっと偉いんじゃないの？友達からあんなに悪口
言われても、友達ことを配慮して願ったんだから」

折り鶴に向かって話しかけているが、もちろん折り鶴は返事をしな
い。そのかわり、色が灰色になった。

「次はどんな人間関係なんだろうね？」

折り鶴は女の子の掌の上で寂しくたたずんでいた。

第一章 **e n v y** 妬み（後書き）

これで第一章は終了です。

e n v yはエンビィと発音します。イナビィではありませんのであしからず

第二章 シラブルそしてミストアーク 第二話

わたしに友達が出来た。

二年生になって初めての友達が出来た。

わたしは今まで友達が出来なかった。

わたしには人を引き付けるものがなかったから？

わたしが何時も一人でいるから？

別に、友達を選んでいた訳じゃない。周りが選んでいたのに違いはない。そうじゃなければ、話し掛けたときそっけない返事をしないはず。わたしは悲しい思いをせずにすんだはず。いじめじゃないと思うけどやめてほしい。

わたしのクラスには、わたしと同じ様な人がいる。だけど、その人と同じにしないほしい。わたしはその人と違ってクラスの集まりには参加している。

だからつくれた。その人とは違う。

まだ、会話はぎこちないけど友達。

お母さんから

『本音と言える関係が友達』

と小さい頃から言われてきた。

『だから友達の本音しか言わない』

とも言われてきた。

わたしは本音しか話してない。

友達も本音しか話してないはず。

わたしには友達がいる。

お互い本音を言い合える友達が。

信頼出来る、信用出来る友達。

あの人の周りにはたくさんの人がある。男の子も女の子も。だけど、周りはいつもわたしの友達にひどいことを言う。でも、友達はいつもヘラヘラして笑って過ごしている。きつと、あの人も無理して友達を作ったんだ。周りからどんなに言われても怒らず、平気な振りをしてまで続ける必要のないのに。友達ならそんなことは言わないはず。もちろん、わたしは言わないよ。だって友達だもの。

季節は夏

坂ノ上高校では夏休みにも授業が午前中ある。午後はそれぞれ思い思いに過ごす。

「第一回！『頭脳と身体を試せ！ツールド坂ノ上！鉄人なら俺だ！あたしだ！私かも！？レース』開催〜！」

「なげえよ！」

「ネーミングセンス皆無ね！」

クラスメートからヤジがとんでいる。

あたしも負けじとヤジを飛ばした。「引っ込め〜変態〜」
クラスメートの視線があたしに向けられた。明らかに冷ややかな視線を向けられたのだが気付いていないフリをしてボケた。

「やだ！みんな、そんな羨望の眼差しで私を見つめないで〜。あたし、困っちゃうよ〜」
さらに冷ややかな視線になった。

あたしの名前は恵美。高校二年生！

自分で言うのもあれだけど、お調子もので、いつも他人を笑わせようとする芸人魂の塊よ！

ああ、この性分でこの美貌が台無しだなあ、と思うこの頃。楽しいスクールライフが繰り広げられています。

ああ、あたしのお陰だなあ。

今は、クラスでなんか楽しいことをしようと考えていて、我がクラスの長が皆が考えたレースに名前をつけた。それに皆がつっこんでいるという構図ね。

そして、あたしに羨望……冷ややかな視線が惜し気もなく送られていくって構図。

「まあまあ、恵美はほっときましょう。では、ルールの確認をします」

またあたし、スルーですか！

「いじめはんたゝい！恵美愛護団体に訴えますよゝ」

「それはいけませんね。そんな営利組織があるなんて、早々に撲滅しなくては！」

「あたしは金の亡者じゃない！あたしの心はスワンのように澄んでいるんだから」

「あら、スワンのように澄んでいるなら授業中騒ぐのかしら？」

「ささ、委員長！説明を」

あたし、負けちゃった！

くっ、委員長が勝ち誇った顔であたしを見てる！くやしい！

「まず、この教室から一番遠い美術室に行ってもらいます。そして、私が事前に用意していた『美術室に来ました証明書』を取って戻って来てください。」

「ボス！それじゃあただのレースではありませんか！」

「甘いですよ、恵美。『美術室に来ました証明書』と一緒に『美術室にしか無いもの』を持って来てください」

「ボス！それはなんですか？」

「それは考えるのよ！そこがこのレースの『頭脳』の部分です。わかりましたか？」

「はい！」

「ズルしたらいけませんよ。もししたらそこで負け決定了」

「バツゲームはあるんですか？」

「もちろんです。では開始は一時間後。欠席する人は私のところまで来てください」

こうして委員長の説明とクラスのお楽しみ会議が終わった。

あたしはスッゴク楽しみ！こう見えて運動神経は驚異的！スタイルも抜群！

ああ、なんてスーパーウーマンなのかしら、あたし。すると、クラスの男子数名が話しかけてきた。

「恵美がいるなら俺達はドベにはならないよな」

「だよなあ」

「な、なんだとお？あたしより足遅いくせに」

「このレースは頭脳も使わなきゃならねーんだろ？」

「そしたら、このクラスで一番偏差値が低くて、馬鹿なお前がドベに決まってる」

「ふん！こっちには秘策があるんだから嘘だけだ。」

「ほお、じゃあ楽しみにしてるぜ」

笑いながらあたしから離れていった。

クッソー。男だったら女の子を大事に扱えっの。

ん？男……そしてあたしは女の子………本当に秘策が出来た。あたしは体操服を片手にトイレに走った。

第二話

一時間がたった。

あたしはやる気満々よ。なんせ、あの生意気男子にぎゃふんと言わせるために下準備してきたんだから！

ああ、なんてあたしって頭の回転がはやいんだろう………性能は悪いけどね。

みんながぞくぞくと集まってきた！

委員長！早く始めよ、って思っていたら早速開会宣言を始めた。あたしの必死の思いが伝わったのね。

「では、『頭脳と身体を試せ！ツールド坂ノ上！鉄人なら俺だ！あたしだ！私かも！？レース』を始めたいと思います。ちなみにリタイアしたのは鈴原さんだけです。残りは参加しています。ドタキャンしていないんですが」

と委員長。

ここは一発、盛り上げるためにあたしが一つギャグを言いましょうかね！

「友よ！この暑さの中、無事に帰って来い！そなた達を待っている人のため、そなた達の無事を願っている人のため、そなた達を信じている人のため！あたし……こほん、私はそなた達を友達と思っているため宣言するのだ！この負けるな！」

決まった………これはあたしに惚れる人がでるんじゃない？火傷じゃすまないわよ。

囁き声が聞こえる。あたしは立て耳、じゃなかった、聞耳をたてた。ちなみに2000ヘルツまで聞こえる超高性能よ。

「なんか、言ってることおかしくね？」

「言葉の使い方もおかしいよね」

「頭もおかしいけどな」

「あれでも頑張っているんだとよ」

「頑張っただけか……」

「才能だな」

えらい言われよう。だがあたしはくじけない！この状況をバネに使い、さらなる笑いに精進する！

「カチーン。スワンの様なこのあたしの完璧なるボディに牛乳を染み込ませた雑巾を投げやがって！ゆるすまじ！」

「誰も体のこと言っただけ無いか？」

「考えていることより先にバカがでるんだろうな」

「なげかわしい」

みんな、キツイな。ま、そんなことでへこたれるあたしじゃないけどね。

これでみんな、楽しそうになってるからいいんじゃない！

どうやらスタートのようね。

あたしはスタートラインでベストポジションをとった。

ちなみに、あたしを含めた二人の女の子以外はアドバンテージがある。走る距離が二人と男子が走る距離の四分の三よ。なぜ、あたしがアドバンテージを受けなかったのは、作戦のため！まあどうせあたしは運動神経イイから勝手になるだろうけど。あと一人はただたんに運動神経の良さでね。

さらに、ちなみに、みんな体操服に着替えているんだけど、あたしは制服のまま。それも作戦！

覚悟！男ども！あたしのフロディテも真っ青な魅力に酔うがいい！付け加えて、さらに、ちなみに、フロディテは美と愛の女神のこ。と。まあ、あたしのミスコン仲間ってところかな。

委員長がスタートの合図をとるようね。（なんか、スタートまで大分時間がかかったような）

「よい……スタート！」

みんな、一斉にスタートした。

あたしのスタートはサブレット顔負けのスタートね………っ
ていいところだけどそうもいかない。あたしのにつきき男子どもは
スタートすらしてない。他の選手はアドバンテージを受けていない
もう一人の女の子と先頭争いをしている。やるわね、パン屋の娘。

あたしはレースの邪魔にならないようにサイドに移動。

またまた、付け加えて、さらに、ちなみに、廊下を走るわけなんで、
一般生徒とぶつかることがあるよね。だからって、タイムや言い訳
なんかしちゃダメ。それはジャマー（障害物）として認識されてる
からね。避けて走るのよ。みな条件は一緒なんだから。先生の場合
も一緒。例外があるとすれば、好みの異性とぶつかって運命感じた
時ぐらいかな。

スタート地点を見ると、男どもはやっとスタートした。徒歩で。
ん？委員長がスタートしてない。どして？

「委員長！なんでスタートしてないの？」

「それはお前を食べるためだよ」

「やだ！いくらあたしが赤ずきんちゃんみたいにかわいいからって
……………」

「ゴールした順番を確かめる係です」

せっかくノってやったのに。」

「そっか。委員長も大変だね」

「仕事ですから。それより出発しなくていいの？」

「そうね……って騙されないんだから！アンタ、ホントは罰ゲームを受けたくないから自分から立候補したんでしょが！」

「私が罰ゲームを考えることになっているですよ」

「このチキンオオカミめ」

駆け出した。

あたしはやっとスタートした。

第三話

そういえば、あたしが体操服に着替えていないことに誰もつまなかつたな。やっぱり、『またか』みたいに思われてるのかな。ま、そっちのほうに都合がいいけどね。

おっと、前方にあたしを侮辱した男ども発見！

未だに歩いてる。舐めてるな。

よし！作戦実行！

「ねえねえチミ達」

「ん？って恵美か……お前、こんなところでロスっていいのか？」

「ここで、時間とると頭脳勝負に時間かけられなくなるぞ」

「恵美って運動神経だけは発達してるのになんでこんなところにいるんだ？」

よくぞ聞いてくれた、最後の輩！それはお前達を食べるためだよ！

あたしは、コイツらを追い抜いて、後ろ向きで走った。もちろん作戦ね。

「いやあ、ちよっくらシエスタしてたもんで………つてきや！」

あたしは盛大にコケてやった。この男どもの目の前で。
男といえば、女の子の

「キヤーモーレッツ！」に弱い！

だから、こいつらにいっぱい喰らわせるために『恵美ちゃん特性セクシーポーズ』をお見舞いしてやったのよ！

内容はスカートを極限までめくる！それだけ！（保険のためにハーフパンツはいたけどね）

これで男どもはメロメロね。

見て！目の前の男どもはあたしに釘付け（セクシーな足に）！
それに加えて、

「キヤー！ヘンタイ！女の子の倒れた姿を凝視するなんて」
と言った。

これで、世間はあたしに味方してくれる。

ああ、なんて高揚感かしら………あの男どもが顔を真っ赤にして逃げて行ってる。あたしの勝ちね。

ホーホッホッホ！

気も晴れたし、それじゃボチボチ行こうかね。

どうもみんな、美術室で戸惑ってるわね。誰ともすれちがわなかったから。

美術室につくと正に戦場。みんな血眼になって『美術室にしか無いもの』を探している。

あ！ウチのクラスの秀才、佐倉さんも考えている。こりゃ難問だ。まあ、とりあえず『美術室に来ました証明書』をとって考えましよう。

間

よし、考えるか。とりあえず思いついたのはこの『美術室に来ました証明書』かな？これこそこの美術室に無いものだし。ま、ダメでしょうね。だって、『美術室に来ました証明書』と何かっていつてたし。

うん、困っちゃた。

これなら、借り物競争で『異性』って書いてあった方がいいわね。

ん? 『異性』 …………… そーよ! 美術部員を連れてくればいいじゃない! これこそ『美術室にしか無いもの』よ。
んじゃ、手頃な部員に声かけようかね。部活はぎりぎりあって無さそうだから問題ないっしょ?

「ねえ君?」

あたしは、絵を書いている(ごめんね!) 少年に話し掛けた。

「はい?」

キョートーンとした表情。そりゃそうよね。

「何年生?」

「一年ですけど……」

「そりゃよかった! ちょっと二年の教室まで来て!」

そう言うのと、あたしは彼の腕を握り駆け出した。

なんか、駆け落ちみたいでロマンチック!

「えっええええ! 助けて!」

誰に求めているのやら。

これで、あたしの優勝は確実ね。

ホーホッホッホ!

勝利を確信し、歩きながら教室に向かってしていると

「待てええええ！」

と聞こえてきた。

ヤバ、もう追ってがきた。これは急ぐしか無いわね。

「走るよ！」

なんか、連れてきた少年が悲しい表情をしたのは木の精霊のせいにしとこうかな！

ゴール（教室）まであと少し！少年頑張れ！

相変わらず、後ろには誰かが迫って来ている。だが、あたしの運動神経はクラストップクラス！簡単には負けない！

「待てええええ！恵美い！」

「待てって言われて待つ人がいるわけないじゃん！」

あたしは、勢いよくゴールの扉を開けた。

「いっちばーん！」

中では委員長が待っていた。そりゃそうよね。

「恵美が一番ですか。さすがですね。で、持って来るべきものは持って来ましたか？」

「当然よ！」

あたしは、『美術室に来ました証明書』と男の子を差し出した。

「この子は？」

「美術室にいた美術部員よ！合格でしょ？」

「まあ、いいでしょう」

やったーと喜びに浸っていると、勢いよく扉が開いた。

どうやら、あたしの後ろにいた追っ手はアドバンテージを受けていない女の子だったようね。

まあ、あたしが頭脳で勝っていたから勝った。それだけね。

「茜は二着です。では証明書を………っておーい」

委員長が対応していたが、それを無視してあたしの方にズンズンとやって来た。 なったに？

「その子を返しなさい」

「はい？」

急に言われても困るんだけど……

あたしがボケツとしていると連れてきた少年がアドバンテージ少女

の方に走って行った。

「あ！トンボ！」

え？顔見知り？てゆうか、トンボってだれ？

まさか、茜の本名ってトンボ？

まさか！

「よかった……無事で」

「大げさだよトンボは。こっちは男の子だよ。これは確率100%で」

「はいはい、もみじは男の子ね」

え？男の子の方の名前はもみじ？

まさか！。男の子の本名はともかく、茜の本名って私、知ったか振りだったのかな？

実は、茜はペンネームだったりして！

って言うか、なんか、あたしってかなり空気なんですけど。ちょっとショックを受けていると、委員長が話し掛けてきた。

「あの二人、きっと付き合っているんですよ」

「でしょうね。なんか、ラブラブムード全開って感じ。ちょっとム

カツク」

「まあ、いいじゃありませんか」

「そうね。あたし、トンボにもみじを返したほうがイイみたいね。邪魔しちゃ悪いし」

別に、三角関係でもないしね。

「ほう、茜にあの少年を返すと」

あ、なんか不味いこと言ったかも。

「それでは、恵美。あなたは罰ゲームです」

「えええええ！どうして！？」

「持って来るべきものを持って来てないからです」

ハッとした。あたしは、『美術室にしか無いもの』を茜に渡した。ということは、放棄した。ということは、条件を満たしていない。ということは、インチキゴール。ということは、罰ゲーム。

いつ、いやだあああ！

「茜に返して貰ってくる！」

「恵美、『人の恋路を邪魔するものは、馬に蹴られて死んでしまえ』って言葉知っていますか」

うぐう。人の良心につけこんで。

どうやらあたしは、アポロンになって、ハデスに連れ去られたみた

い。 （本当の話ではペルセポネだけだね）

結果

あたしは罰ゲームを受けることになった。もう一人、なぜか罰ゲームを受けることになった。

もう一人の名前は舞。最近、親しくなった女の子。

あたしは後悔した。

面白半分の罰ゲームが取り返しのつかない出来事にしてしまったことを。

第四話

あたしはブルーだ。自分がした人道が裏目にでるとは。これが俗に言う『飼い猫に足を噛まれる』ってヤツ？

あたしが落ち込んでいると、一緒に罰ゲームを受ける舞が励まして来た。

「ドンマイだよ、恵美ちゃん！結局はゲームなんだから楽しもうよ！わたしはウキウキだよ！」

舞ちゃんがにこーつとして話す。

この子には緊張感がないの？

「あのねえ舞ちゃん。委員長がなに言ったか覚えてる？」

沈黙。そしてえへへっとした顔が現れた。覚えてないようね。

「委員長はね『では、罰ゲームの知らせは世にも奇妙な方法で知らせるので楽しみに待っていてください』って言ったの。あたしの今までの経験と女の勘が『こりゃヤバイぜよ！』って知らせてるの！きつと世にも恐ろしいことが始まる〜」

「『虫の知らせ』って言うヤツだよな。でも大げさだよ！常識的に考えて『お持ち帰りの牛丼を頼んで、店の中で食べなさい』とか『ドライブスルーを自転車で頼みなさい』とかだよ」

「舞ちゃん……それって古くない？」

「えー？そうかなあ。でも定番は新旧ないから大丈夫だよ」
そしてにこーっと笑った。

「大体、そんな精神的に辛いだけのものじゃないから。それに、悪
乗りでクラス全員がグルになって考えるに違いないから相当なもの
になるはずよ」

これだから世間知らずこお嬢様（かどうかは知らないけど）は！！
「そ、そうなの？」

舞ちゃんの笑顔がひきつる。

「この一学期間、クラスの大体のヤツと話したり、一緒にいたりし
て思考はわかったつもりでいるからね。舞ちゃんは分からなかった
のかな？」

「わたしはクラスの人と話さなかったから」
舞は笑顔になって返事をした。その顔には寂しさなどは感じられな
かった。少なくとも恵美には。

「恵美ちゃんが初めてで唯一の友達だよ！しかも、本当の！」

この子、なに言ってんだか。恥ずかしいじゃないの！
そのおかげで

「ま、まあアリガト。」

って、つまらない返事しちゃったじゃないの！

今度からは、『えー、やだなー』って言ってやるんだから！

「でもさ、なるようにしかならないよね」
あたしの呟きと本音。

「まあそうだよ。恵美ちゃん、一緒に頑張ろ！わたし、恵美ちゃん

と一緒だったら頑張れる！」

笑顔の舞ちゃん。本音………なのかな？

もしかしたら、舞ちゃんは委員長に頼まれた仕掛け人かもしれないし。だって理由聞いても、『友達だからだよ！』って笑顔で言われたし。

この子、油断できない！

大体、クラスメートと喋ってないなんて有り得ないでしょ！

「とりあえず、帰りましょ。罰ゲーム同士」

「うん！」

あたしと舞ちゃんは一緒に家に帰った。

舞ちゃんはあたしの家の方向に家があるらしく、あたしの家に着くまでずっと喋っていた。

好きな男の人の名前、好きな歌手や俳優、逆に嫌いな歌手など、帰る時はいつも同じ様な話題ではなしている。

いつものあたしなら、『舞ちゃん、また同じ話題でつままないよ。』

舞ちゃんってさ、あたしよりつままない人間だね。』とか軽い冗談を言うんだけど、如何せん、仲良くなってまだ日がたってないから言っていないだね。

舞ちゃんがクラスメートみたいに、あたしを馬鹿にする言動をしないのも一緒だと思う。

でもそろそろ頃合いかな？

「じゃあね」

「バーイ！」

心の中で『ふるっ！』っと思いつながらあたし家に入った。
その時、舞ちゃんはドアを閉めるまで手を振っていた。

その夜、あたしが部屋でくつろいでいると、塾帰りの一つ上の姉（
いわゆる受験生ね）がいきなり入ってきて尋ねてきた。

「恵美……夢ってなに？」

突然のことで、意味が分からなかったから枕を投げてやった。
あたしの言いたいことがわかったかな？

そうして、一日が終わった。

次の日

夏休みなのに登校するあたし。なあって生徒の鏡なんですよ！

いやあ、本当を言うと授業があるだけで登校してるわけで、本音を
言うて行きたくはないんだけどね。

それで、登校中はストーカーされることもなく、怖いお兄さんにか
られることもなく、事故にあうこともなく、ケロベロスに噛まれ
ることもなく、タナトスの声を聞くこともなく、ハデスに連れさら
われることもなく、ただただ紫外線を浴びながら登校したってわけ。
出会いかなんかないのかなあ。

ああ、あたしの運命の赤い糸は、まだ運命の人の糸と平行になって
いるのね。

そしていつかその人と結ばれて………きやああああ!!

限りなく膨らむ乙女の妄想

場所は生徒昇降口

あたしがいつもの様に自分の下駄箱（下駄はいれてない!）を開けると、白いものが『床に落ちている』ことに気付いた。

それは折り鶴だった。綺麗に作り上げられた真っ白な折り鶴。

その白さといったら、ちょっとした色でも敏感に反応してその色に染まりそうな白さ。

あたしはなんとなく拾い、手に持ったまま立っていた。

何分経ったかな。

舞ちゃんが生徒の波を滝登りをして来た。

そして、あたしが持っている折り鶴を見るなり笑顔で話しかけた。

「恵美ちゃん! 恵美ちゃんにも知らせが届いたんだね!」

「え? これって知らせなの?」

「うん、そだよ。だってあたしも拾ったし、ほら! 中も見てみて!」

あたしが折り鶴を解体して中を見ると文が書いてあった。

『この折り鶴を拾った人は願いを叶えてあげます。もし叶えてもらいたいならば、夜、学校の屋上に来てください』

なるほどね。これが委員長が考えた『世にも奇妙な方法での知らせ』ってわけね。

確かに、折り鶴で罰ゲームの知らせってのは奇妙で新鮮ね。

「でも恵美ちゃん、これに決行日は書いてないよ」

読み返してみるとそうね。
だけど！

「これは、いつでも来なさいってことに決まってる！」

「自信満々ってこと？」

「そ！ってことで今日、決行ね！」

「善は急げ！ってこと？」

舞ちゃん…………それはだいぶ違うよ…………

「でもさ、委員長も人が悪いよね。わたし達が罰を受けるのを願いたいを書いてちゃってさ」

「でも、あたし達は願い（罰）を叶える（受ける）のが前世からの宿命なのよ。運命じゃなくてね」

あたしと舞ちゃんは笑った。昇降口だったからちよつと恥ずかしいかったのはご愛敬。

昼休みって言うか放課後、二人は委員長にバレない様（だってなんとなく嫌だから）に折り鶴のことについて話した。

「でも、なんで鶴なんだろうね？」

「なんか鶴ってめでたいものだからじゃないかな。鶴は千年、亀は万年って」

「なるほど。そこまでして、委員長はあたしをけなしたいと言うわけね。」

あたしは妙に納得する。

それにしても、まあ、なんてあたしは悲劇のヒロインなんでしょう。

「にしても、この折り鶴、良く出来てるよね！わたしはこんなに上手くつくれないよ！」

そう言って舞ちゃんは自分の折り鶴を見た。あたしのと違って黄色だった。

確かに良く出来た鶴。一度解体して組み立てても、折り目がキツチリとしていて元の綺麗な折り鶴になった。

なんか………すごい。

学校集合は八時としてあたしは家に帰った。
さあ、願いを叶えて貰おうじゃないの！！

第五話

八時 校門前

あたしと舞ちゃんは問題にぶちあたった。

「どうしよう。職員室の明かりが付いてる………きっと先生がいる………」

あたし達はてっきり罰ゲーム御一行様の貸し切りと思ってたから、入るのに躊躇った。

だってそうでしょ？先生に見付かったら叱られるに決まってるでしょうが！

まさか！このスリル満点の冒険が罰ゲーム？大方、肝試しとかだろうと思っていたらどんでん返し。

さすが、委員長と悪知恵の仲間たち。伊達に十七年生きてないわね。そう思って、あたしは折り鶴を恨めしそうに見た。つられて、舞ちゃんまでも取り出してあたしと同じ目付きで折り鶴を見た。

「恵美ちゃん、どうしようか？」

でもさすがの舞ちゃんも戸惑っている。昼間の『どんとこい！』の姿はどこにいったのやら。

だが、一度決めたことは最後まで貫く。これはあたしの信条よ。そういうことで、

「それじゃ行こうか、舞ちゃん」

「うん」

あらら、『ちょっと待ってよ』。心の準備がく』とか言いそうな顔だったのに、もう変わっちゃったよ。

この姿は『恵美ちゃんと一緒だったら大丈夫だよ』の姿ね。

あたし達は正面から堂々と校内に入った。

駐車場には車がポツンと一台しか留まっていない。どうやら、先生は一人しかいないようね。これなら、見付からずに屋上に行けそう！

顔に似合わず（顔はいいんだけど）頭を使ったのがいけなかった。

舞ちゃんも気付かなかった。職員室の明かりが消えてしまったことを。

そう、あたしは五感が感じないほど頭を使っていたということなのですよ。舞ちゃんも同じく。

当然、中にいた先生は帰るために駐車場に来るわけで、その駐車場にいるあたし達は見付かってしまうということは確定。だが、あたし達はそれに気付かず頭を使っていた。

「そこにいる生徒は誰だ！」

あたし達はビクツとして只今の現状を把握した。最悪ね。

「見付かっちゃったね恵美ちゃん」

「そうだね舞ちゃん。どうしようか？」

あたし達が小声で話している間も先生が近付いてくる！

策は………あるわけないでしょーが！

どうせなら優しい先生というのが最後の望み。おーい、折り鶴って言うか委員長、願い叶えてよー。

刻一刻と迫るアンノウン先生。あたし、今だったら蛙の気持ちがかかるかも。

ついに、先生の顔が見えた。その顔はあたしはもちろん舞ちゃんも

見覚えがある顔だった。

「倉先生！」

倉先生は今年赴任してきた新米の先公だ。

ほんと先生なの？ って言うぐらい生徒や校則に甘く、生徒のことを真剣に考えることから生徒に人気がある。

みんな敬意を評して『センコー倉』とよんでいる。

あたしのクラスに授業しに来ているほかに、一年生の担任じゃなかったかな。というわけで、例に漏れずあたし達は適当な話術を使ってその場を切り抜けた。

まあ、バレバレでしょうね。バレてないなら『忘れ物を取りに来ました』ぐらいに『十時になると警備員に気を付けろ』（二時間後なのに）や『出る時はトイレからでろ』（取りに行くのはすぐ終わるのに）とか言わないから。

かなり、センコー倉に感謝。

「倉先生で良かったね！」

さっきの不安はどこにいったやら、舞ちゃんの顔に笑顔が戻った。

「恵美ちゃん、第一関門突破だね！」

「うん。でも十時になるまえに罰ゲームは終わらないと」

どうやって終わらせるかは知らないけど。

そうしてあたし達は、屋上にたどり着くべく、倉先生が開けてくれた生徒昇降口から入った。

夜の校舎は不思議な感じだった。

聞こえる

静かな夏の夜の音と耳鳴り

それは自然の音

邪魔をするのはあたしと舞ちゃんの足音だけ

立ち止まると静かすぎて少しうるさいぐらいに

途中は何もおこらなかった。罰ゲームと思える出来事も。

おかしいな、不思議なことはなにもない。気にかかったことは、舞ちゃんの話がいつもにもまして内容が深かったこと。

それも、屋上につくまでの数分間の間だけのこと。屋上のドアの目の前につくと緊張しているのか、喋らなくなった。覚悟を決めてあたしはドアを開けた。

第六話

屋上には誰もいなかった。

あるのは、夜空の欠けた月と星。

聞こえるのは、虫の音。

「誰もいないね、恵美ちゃん」

「そうね。でもアイツらの罰ゲームは油断したらダメよ」

そう言っ、あたし達は息を潜めて五分間、物音を一切たてずにいた。

だが、ことが起きる様な気配は無く、いくらなんでも静か過ぎるので舞ちゃんが疑い始めた。

「ねえ恵美ちゃん。これは流石におかしいよ」

「ん、どうして？」

「だって、罰ゲームを始めるのにしろ、内容がわかんないし、人もいないから、どうすればいいかわかんないよ！わたし達、騙されたんだよ！」

舞ちゃんの力強いセリフ。こんな舞ちゃんは初めてだった。

「そ、そうかもね。あした、委員長に告訴しましょ」

いつもと違う舞ちゃんの立ち振る舞いに物怖じしたあたしは、舞ちゃんの機嫌を損なわないように帰宅を提案した。

「そんなことしないでいいよ。恵美ちゃんがまた馬鹿にされるだけだよ！」

「えー、あたしは馬鹿にされるのは役割みたいなものだからな」

「ダメ！あんな奴らと無理して付き合っちゃったらダメになるよ！」

「コラ、友達に向かってそんなこといわない！」

「あんなの、友達って呼べないよ………」

怒っている舞ちゃんをなだめつつ屋上から出ようとドアノブを手をかけると、いきなりポケットに入ってる『何か』が白く光りだした。ケイタイの光とは比べられないくらい強い光りだった。

その『何か』を取り出してみると今朝見付けた折り鶴だった。

あたしのだけじゃなく、舞ちゃんの折り鶴も光っていた。ただ、舞ちゃんのは金色に光っていた。

「なっなに？これは？」

「知らないよ！わたしが光らせたわけじゃないから！」

あたし達は混乱していて状況が全く処理出来なかった。

把握出来始めたのは数十分後だった。

「クールになりましたよ、舞ちゃん」

「うん、そうだね。」 あたし達の手の中にある折り鶴は変わらず輝いている。

「なんで光っているんだろうね？」

「委員長とかが細工したとか。だいたい、委員長の作戦だし」

「えー？ただの折り紙が急に光り出すっておかしいよ。蛍光塗料とは比べられないほど輝いているし」

そうね、あたしはそう判断した。いくらなんでも、こんなうすっぺらい折り紙から、普通の電球より明るい光りを出せるはずがない。あたしの頭では推測が巡っていた。

「恵美ちゃん……………」

舞ちゃんがヨワヨワしい口調で話しかけて来た。

「今の技術で紙を発光させることって無理だね？」

「奇遇。あたしもそのことについて考えていたところ。結論は『ない！』に決まったんだ」

「人間の仕業じゃないってことは……………」

舞ちゃんの顔がひきつっていた。

「…………オバケとかの仕業なのかな…………恵美ちゃん……………」

「ま、まっさかー！この、ナノテクノロジーが口笛吹いて出回っている二十一世紀にそんなことあるわけないじゃない！」

あたしは口では強気に言ったが、心の中では正直不安で一杯だった。

この目の前で起こっている非科学的な現象は、科学的に証明されていない者の仕業としか思えないのだ。

「舞ちゃん、とりあえず離れないようにしよ」

「……うん。恵美ちゃんだけが頼りだよ。いつでも」

「ま、まかせて」

舞ちゃんの顔に少しだけ安心感が感じられるようになった。その瞬間、舞ちゃんが持っていた黄色く光っている折り鶴が更に黄色く光り始めた。

「え、え？なに？舞ちゃん、何かした？」

「何もしていないよ！」

また慌て始めてしまった。

だが、今度は数秒で落ち着いた。背後に気配を感じたから。舞ちゃんも感じたらしく、静かになった。

「誰か……いるの？」

恐る恐る気配のする方に尋ねたが、返事は返ってこなかった。

「なんだろうね？さっきの気配。恵美ちゃんも感じたんでしょ？」

「そうだけど、結局は誰もいなかった……と思うけど」

確かめれば良かったけど、あたしと舞ちゃんには、いや誰も確かめに行けないとおもう。

こんな場所はすぐに立ち去った方がイイ。あたしはそう思って、『帰ろう』と言おうと舞ちゃんの方に振り向くと、舞ちゃんは難しい顔付きで折り鶴を見ながら話しかけてきた。

「ねえ恵美ちゃん。この折り鶴に書かれていたことって覚えてる？」

「覚えてるよ。たしか『この折り鶴を拾った人は願いを叶えてあげます。もし叶えてもらいたいならば、夜、学校の屋上に来てください』だったっけ？それがどうかしたの？」

「もし、もしだよ。これを作ったのが委員長じゃなくて、願いを叶えてくれる人が作っていたら、今の状況って説明出来るよね？」

「そういえば、あたしってこの折り鶴は『拾った』んだよね。下駄箱の前で。今思うと、委員長の仕業とは考えにくいかも。舞ちゃんはどうやってそれを見付けたの？」

「わたしは教室で見付けたよ。教壇の上だったっけ。あまりに精巧に作られていたから恵美ちゃんに見せようとしたら、同じ物を持っていたから罰ゲームの招待状って思っちゃった」

「……………」あたし達の間に沈黙が続いた。

「もしかして、本当に願いが叶うとか…」
あたしは本気でそう思った。

「そ、そうかもしれないね」
舞ちゃんも本気のようにだ。

誰が合図したわけもなく、あたしと舞ちゃんは折り鶴を解体し始めた。

折り鶴が折り紙になっていてもまだ輝いていた。輝いているのは変わらなかったけど、あの文が変わっていた。

長い文が一言に変わっていた。『願いを』と。

「恵美ちゃん見て！文が変わってる！」

「あたしのも！これはホントに願いが叶うんじゃないの？」

「わたし達って選ばれたのかな！」

舞ちゃんにはさっきの怖がっていた表情はなく、出発前の顔、無邪気な笑顔に戻っていた。

そういうあたしも、ウキウキした顔になっていた。

「早速、願ってみようか？」

「うん！わたしからでいい？」

「ちょっと待ったー！もし一回制だったらあたしの『運命の人との出会い』という野望はどうすれば！」

その時は、折り鶴が光っていたことや、背後に気配を感じていたことに対する恐怖心はなくなっていて、いつものあたし、つまり、教室にいるお調子者のあたしに戻っていた。

「じゃあ、恵美ちゃんお先にどうぞ！」

「あ、いや、うんうん。舞殿がお先にどうぞ。この世は義理と人情と友情と愛情と思いやりの世界。他人に道を譲るってのもあたし……じゃなくて……あっしの心意気よ！」

「あはは！恵美ちゃん、面白いよ！じゃ人情に甘えてお先に失礼し

ます！もし一回制だったら、わたしが恵美ちゃんの白馬の王子様をつれてくるよ！」

舞ちゃんにも余裕が出来たみたいだった。

そして、折り紙を握りしめ、一呼吸ついて願いを言った。

「わたしと舞ちゃん、いつまでも親友でいさせて下さい」

「え？」

そんなの当たり前じゃない！恥ずかしいでしょ！あたしはそう思った。

舞ちゃんが少しだけ顔を赤くしてあたしの方に振り向いた。

「願いじゃなくて希望だけどね！」

「どう違うの？」

「願いは絶対的に叶えたいもので、希望は『だったらいいな』的なものかな」

「ふうん。でも叶ったかどうかはおばあちゃんにならないと分からないね」

「あはは！そうだね！」

「でも、あたしは美しいまま散っていききたいんだけどな」

「ダメだよ。女に生まれたからにはおばあちゃんになっても美しく生きなきゃ！」

「それって、あたしにしか出来ないんじゃない？一生美しくって」

「そうかもね！わたし整形しなきゃ！」

「大丈夫！舞ちゃんは二番目に美しいから！」

「じゃあ、一番目って恵美ちゃんのこと？」

「ん！正解！」

あたし達は屋上に来てからやっと普通の会話することが出来た。普通の会話がこんなに楽しいなんて今まで気付いたことは無かった。

「あたしも願いを言ってみようかな」
しばらく笑いあってから切り出した。

「例え叶わなかったとしても舞ちゃんが探してくれるから心配ないけどね！」

「まかしといて！」

あたしには特に願いなんて無かった。

毎日に充実していたし、真剣に悩むほどの不満なんて無かった。
だから、あたしの言うことは決まっていた。
うその一言。いつものあたしの冗談。

「あたしと舞ちゃんの絶交！」

あたしは楽しそうに叫んだ。

折り紙は輝きを増すわけでもなく、減るわけでもなく光っていた。

第六話（後書き）

この小説に二つ同じタイトルで同じ内容の『話』がありました。以前に消そうとすると『この話は存在しません』と出て消すことが出来なかったのですが、今日、なんとなく消そうとすると消せるじゃありませんか！

そして意気揚々と消してみると、なんと！二つとも消えているじゃありませんか！

12話から一気に10話になってしまいました。

『アッチャー！』そう思ったのも後の祭。また書かなければならなくなりました。

大体の流れは覚えていますけど、完璧に復元は無理です。すいません。調子にのったら人生こうでした。

第二章 SYLLABLE そして mistake

「恵美ちゃん………」

舞ちゃんの顔から笑顔がなくなった。

さすがにやりすぎた、と思って慌てて否定した。

「ウ・ソ・」

と。

だけど舞ちゃんの表情は元に戻らず、顔を怒りに染めていった。

「恵美ちゃん………何でそんなこと言うの？わたし達、友達じゃないの？」

「だから、ウソだって！冗談を言ったただだから！」

この時は、舞ちゃんはただ誤解しているだけ、と思ってまだ余裕があった。

「だからさ、口ではあんな風にいっちゃったけど、そんなこと全然思っていないから」

苦笑いで弁解するあたし。だけど、舞ちゃんの顔には笑顔が戻らなかった。

「………ウソ…でしょ」

舞ちゃんの絞りだした様な声。ついさっきまでは、どんな状況でもあたしに聞こえる位の大きさだったのが信じられない。

あたしは聞き取ることが出来ず聞き返した。

「え？」

「ウソでしょ！」

今度は大きかった。だが、怒気を含んでいた叫びの様に思えた。

「わたし、せっかく友達が出来たと思ったのに……せっかく親友が出来たと思ったのに……」

「……………」

「もうイヤ！」

舞ちゃんはそう叫ぶと、走って屋上から校内に入ってしまった。

あたしは、余りにも突然のことだったので呆然としていた。

静かな夜に時折聞こえる舞ちゃんと思われる足音。それも次第に聞こえなくなり、静寂があたしの周りを支配した。

あたしは、最近の出来事を整理してなぜ舞ちゃんがあんな行動をとったのかを推測した。

クラス会

罰ゲーム

折り鶴

一緒に帰宅

夜の登校

不思議な現象

そして、舞ちゃんの言動

この様な出来事があたしの頭に渦巻いていた。

そして、出した結論は『折り鶴が、あたしが冗談でいった願いを叶えたから』だった。

「この折り鶴、余計なことをしたわね。あたしが本気であんなことを願うと思うの？」

「それは違います」

前方の手すりの方から声が聞こえた。

さっきまでは居なかったはずなのに、あたしと同じ位の年頃の女の子が立っていた。そして、こっちに向かって歩いて来た。

「誰？」

「そうですね、平たく言えば傍観者ですね」

「傍観者？」

「はい。今日のあたな方の出来事を全て見させていただきました」

「それじゃ、あなたはこの折り鶴に憑いてるオバケ？」

「その様なものです」

「ふーん。じゃあさ、なんであたしの願いを叶えたのさ」

「私は傍観者ですよ。何も手を出さない、見ているだけの。願いを

叶えるのは私じゃありません。それに、あなたの願いは叶っていません」

「ウソ！じゃあ、なんであたしと舞ちゃんが絶交したのよ」

女の子はここで

「ハア」と溜め息をついた。

「一番悪いのはあなたです」

「あたし？どうして！」

「あの人はあたなを『親友』と思ってました。だけど、その『親友』の口から耳を疑いたくなるような台詞が出てきました、『絶交』と信用していて信頼もしている人からその様なことを言われると、普通あんな風になります」

「冗談って言ったじゃない！それに、普通友達だったら軽口言い合ったり、冗談で悪口言い合ったりするじゃない！」

「じゃあ、あなたは友達だったら冗談で毎日『早く死ねば？』って言うっていいんですか？」

「それは、度が過ぎてるじゃない！そんなこと言われたら誰だって絶交する」

「そうですね。じゃあ、毎日冗談で友達の悪口を言っているんですか？」

「そ、それは……………」

あたしは躊躇った。

友達だったら平気で悪口を言う。でもそれは、お互い冗談だってことを黙認してるから言える訳で、ドッチボールでの『ちゃんと狙えよ！馬鹿』と同じ様なお遊び台詞。

だけど、毎日ってことになると思う。『死ね』は論外だけど、悪口を毎日言われると流石にカチンとくるはず。あたしだってカチンときた時もあった。

「冗談でも毎日言われるとカチンってくるからダメね」

「そうですね。」

「でも、あたしは今日初めて軽口言ったんだよ！舞ちゃんだって大分あたしになついていたし、あんただって舞ちゃんはあたしを信頼してるって言ったでしょ？友達だったんだよ！普通、冗談って分かるでしょ！」

「人間は一度経験しなければ、学ぶのは難しいんです」
女の子の表情が悲しい表情になった。

「一度、友達に冗談を言われたという経験をしてないと、冗談って気付きませんよ」

「そんなわけじゃないじゃない！十七年間生きてきたんだから、一度位経験してるはずでしょ！」

「じゃあ聞きますが、あの人があなた以外の人を話しているところ、見たことありますか？」

舞ちゃんが誰かと話している光景……一度もない。クラス会で集

合した時、いつもひとりぼっちだった気がする。二人一ペアを作る時だっていつも余って、クラスで影の薄い鈴原っていう女の子と一緒にになる。だけど、いつもペアになっているわりには休み時間の時話したりはしない。

それに舞ちゃんの『わたし、舞ちゃん以外友達いないもん』……まさか事実だとは思わなかった。

「一度も友達と話したことがないというわけではありません。小学生の時はいました。だけど、中学生になると状況が変わりました。あの人の友達の交友範囲が広がって、あの人との関わりが薄れてきました」

その状況、あたしにもわかる。

友達に新しい友達が出来ると、あたしに対しての態度があっさりになるって感じで、あまり感じが良いものではない。

逆の立場もわかる。

新しい友達って新鮮だから、つい優先してしまう。

その関係がいつまでも続いて、交友がなくなりもう話さなくなるときもあるし、ひよんなことで元に戻るときもある。

友達がいなくてことは、きっと舞ちゃんは友達みんなが前者みたいになったんだろうと思う。

「そうやって中学時代を過ごし高校生になりました。高校生になってからは友達を作ろうと話しかけたりしてましたが、みんながみんなそっけない態度をとり、友達は出来ませんでした」

「何で出来なかったの？最低じゃない！その人達！」

「それはあたなの方が分かりやすいんじゃないですか？」

「あたし？どうして？」

「高校生の中には、何かの目的で交友関係を作ったり、理由なく友達を選ぶ人がいますからね」

いる。そんな人間はあたしの周りにいる。

ちよっとヤンキーっぽい人やカッコいい人に取り付き、虎の威を借る男子。

自分と違って男友達が多い女の子と仲良くなって、彼氏が出来た途端切り捨てる女子。

やな感じはするけど、あたしはそんな人達とも付き合っている。

「それに人間は同族意識が強いですから、大衆がやっていると違うことをやってると叩かれます」

「……………」

「人間関係って精神使っちゃいますよね。深いし、曲がってますし、たった一言の冗談で誤解を招いて崩れてしまいますし。それに、信用しすぎると危険ですしね」

女の子と会話して、あたしが悪いってことは良くわかった。
舞ちゃんも信頼、信用しているからこそ、あたしが言った冗談を真

に受けて受けてしまった。

「御理解いただけましたか？」

「うん。じゃあどうすればいいの？どうやって誤解をとけばいいの？」

「そんなの知りませんよ。自分で考えて下さい。私はあくまでも傍観者なんですから」

「あなたって薄情なのね」

「ええ。人間、自分のことが好きな人が大半を占めてますから」
少し悲しいそうで、やるせない感じの顔だった。

「決めた。明日、きっぱりと謝る」
それがあたしが出した答え。最善かどうかはわからないが、友達だったらすぐに謝ったほうが良いはず。

「そうですか。それでは頑張ってください」

その時、ホントにこの折り鶴のオバケってことに知った。

あたしは呼び止めた。名前なんか知っても、もう会えないと思うけど聞いてみたかった。

「折り鶴なのに亀？へんなの！あたしは恵美！未来のミス日本よ！」

翌日、学校で舞ちゃんに謝ろうとしたけど出来なかった。

先生が言うには『不登校になった』みたいだった。部屋から出てこないらしい。

あたしは後悔し続けるでしょう。
舞ちゃんとの関係が良くなるまで。

「恵美。罰ゲームのことなんですが……」委員長が話し掛けて来た。だけど

「止めて、委員長。あたし、そんな気分じゃないの」

「恵美が静かなんて……雪でも降るんじゃないでしょうか」
馬鹿にするような口調。あたしはカチンときた。

「馬鹿にしに来たならどっか行って！あたしがいつでもヘラヘラしてるって思ったら大間違いよ！」

「はいはい。心はスワンですものね」

『バァン!!』

あたしはおもいつきり机を叩いた。

「あたしが言ってる意味が分かんないの？」
そう言ってあたしは教室を出た。

「恵美、どうしたんでしょうか？」

「あの日で機嫌が悪いんじゃないの？」

「違う違う！きっと、朝、車に水掛けられたんじゃない？」

「水溜りなんか出来てねえじゃん！」

「いや、わかんねえぜ。アイツはヘラヘラしながら登校してるからな」

「罰ゲームに対してじゃない？だって、あんな選ばれ方したんだから」

「富岡……舞だっけ？アイツと引っ付けられたからじゃね？」

「まあ富岡も富岡だよな。『恵美ちゃんだったら別にいいかな』だってさ！変態だな」

「大体、富岡ってなんか生理的に受け付けたがいんだよね」

「言えてる！」

「佐倉さんはどう思う？」

「私？私はなんか悩んでた気がする」

「そんな訳ないじゃん。アイツが悩む時は試験当日ぐらいだろ！！」

教室の中が笑い声で溢れた。

「黄色は心の危険信号。脆くなってるから注意。たった一言で崩れる時もある。わかった？鶴」

女の子が折り鶴に話し掛けている。その色は変わらず灰色。

「あの恵美って子、これから大変だろうね。クラスメートの大半に誤解されてるから。でも、なかなか友達思い。好感持てるね。それはそうと何で舞って子の願いは叶えなかったの？」

折り鶴は何も反応しない。

「教えてくれてもいいじゃない」

折り鶴は何も反応しない。

「ま、いっか。次はどんな人間関係だろうね？鶴」
折り鶴は女の子の掌の上で寂しくたたずんでいた。

第二章 **SYLLABLE** そして **m i s t a k e** (後書き)

これで第二章は終わりです。SYLLABLEはそのまま『シラブル』と読み、m i s t a k eは『ミステイク』と読みます。

第一章の最後を書き直したので是非！
次は遅くなると思います

第三章 アス 第一話

夏休みが後少しで終わる季節。

生憎天候は良いとはいえない曇り空だが、坂ノ上高校では相変わらず生徒の声で溢れかえっている。

「三年生がまだ午後からも授業があるから近寄らないこと。あと、雨が降りそうな雲行なので帰る時は、車などに気を付けて帰るように。話しは以上だ。号令！」

私は連絡事項を全て伝え終わり、最後の号令を促した。

「起立！礼！」

『ありがとうございます』クラスの委員長の号令で終礼が終わった。

私は、今年、この坂ノ上高校に赴任してきた倉。一年目ながら一年生の担任をやらせてもらっている。

生徒からは『倉先生』と言われているが、時々『センコー倉』と呼ぶ生徒がいる。正直なところ、敬意があるかどうかはわからないから叱ってはない。

ただの冗談かもしれないからだ。

まあ、大抵なことでは生徒を怒ったりはしない。ちょっと前までは学ぶ方だったから、生徒の気持ちはまだ分かってるつもりだからだ。そのせいで舐められているかもしれないが、嫌われるよりはマシだな。

今のところは無視されることはないし、私がだした宿題もちゃんとやってきている。新米のわりには良い方だろう。

「倉先生」

職員室で昼御飯をとっていると、後ろから話しかけられた。

「先生、今日の学級日誌です」と言い、日誌を私に渡した。

「おお、田辺。ご苦労さん。しっかりと書いたか？」

「はい」

「なんせ、しっかりと書いてもらわないと先生が困るからな！」
そう言って、私は笑った。

私に日誌を届けにきた生徒は、私のクラスの生徒の田辺。夏休みに入る前に編入してきた生徒であり、一目見るとマジメな印象で、実際もマジメな生徒だ。
もちろん、成績は優秀だ。

「どうだ？ 来てから一ヶ月たったがどんな感じだ？」

「特にはないです。前いた学校と同じ感じです」
必ず敬語を使う田辺。冷静な口調や表情からは、何も察することができなかった。

「そうか。話し相手とかは出来たか？」

「いえ、できません」

変わることがない表情と口調。

その台詞を聞いて、私は焦った。この年で友達がいらないことはあつてはならないことだ。しかも編入生に話せる相手がいらないことはなおさらだ。担任として、私がなんとかしなければ。

「まあ、大丈夫ですよ。そのうち出来ますって」

「そうか？」

もしかしてイジメでは？と思ってしまう私。

私が高校生の時のイジメといえば『無視』や『集団暴行』と相場が決まっていた。そして今、田辺は『無視』をされているかもしれない。だが、紹介をしたときは騒がれていたし、その後、私の授業の時は質問攻めを受けていた覚えがある。どうなんだろうか。

「お前、クラスメートから無視されたりとかされてないか？」

「先生、俺がイジメられてるとでも思っているんですか？大丈夫ですよ。ウチのクラスにそんな雰囲気はありませんから」

真偽はわからない。私が学生時代にイジメられていたなら、担任に教えるだろうか。いや、しないだろう。だけど、イジメを一度も受けたことのない私には言う権利はない。受けてみなければ気持ちにはわからない。

この問題は担任である私の責任だ。解決しなければ。

私がだんまりしていたのに痺を切らしたのか

「先生？どうしたんですか？俺、部活があるんで行きますね」
そう言って、田辺は職員室を出ていった。

『部活に行きます』とは言ったものの、アイツは部活で上手くいっているのか？

昼御飯を食べるを忘れ、田辺の心配ばかりをする私。生徒名簿をめぐり、何部に入っているのかを調べた。

その結果、田辺は天文部に所属しており。部員は田辺の他に受験生である三年生が一人だけで、実質、田辺だけで成り立っているといってもいいぐらいだ。

三年生は午後からも授業があるので、終わるまで何をやっているのだろうか。

霧消に気になってしまい、天文部の顧問の先生に聞いてみたところ、「わかりません」

だそうだ。

顧問の先生によると、夏休みは生徒の自主性にまかせているらしいので、一緒にしている夜の天体観測以外の活動のことは知らないらしい。

じゃあ、田辺が入部するまで（一学期）三年生は何をやっていたのかと聞くと、

「難しい本を読んだ気がします」
だそうだ。

さらに田辺のことが気になった。

話す相手のいない部室で何をやっているのだろうか。

今日、天文部の部室に行ってみるかと思い、食べるのを忘れていた昼御飯を急いで食べて、学級日誌にコメントを書き、今日やるべき

仕事に一心不乱に取り掛かった。
これも生徒のタメ。教師の経験は全く積もってはいないが、まだ生徒の心は残っている。
これが、私の今の強みだ。

「倉先生、今日は宿直ですよね」

「はい、そうですけど………」

「俺の明日の当番と変わってくれませんか？明日は妻子とご馳走を食べにいくんで」

「ええ。良いですよ」

「ありがとうございます！今度、飲みに行きましょう！」
そう言って、私の当番日が変わった。これも新人のつとめと決めつけていた。

だがこの変更により私は何ともいえない経験することとなった。
後悔………してしまっているかもしれない。

第二話

今日やるべき仕事が一時過ぎに終わった。人間、やる気になればすぐに終わるんだなあ、と思いにふけつつ、天文部の部室に向かって歩きだした。

私は今年設立された硬式テニス部の副顧問というポジションについているが、一度も部室に行ったことがない。私が学生の時、顧問が部室に入るのを毛嫌いしていたので、入らない方が生徒にとってはいいはずだ。

それ以前に、部活に顔をだしていないが。何を言いたいかというと、担当の部活にも干渉したことがないのに他の部活に干渉しようとしているのは不思議だな、ということだ。部活といっても個人目当てだが。

「田辺。倉だが入っていいか？」

天文部の部室をノックして言った。

「倉先生ですか。どうぞ」

意外にすぐに返事が返ってきた。妙なことはしていないようだ。

「入るぞ」

中に入ってみると、教室の半分ぐらいの部室に、いろいろ道具や機械がところ狭しと置いてある。

だからといって、整理がされてない訳ではなく、効率よく整理整頓がされているようである。

田辺は、中央に置いてある円卓で勉強をしている。

「先生、何の用ですか？」

「いや、別に用がある訳じゃないが……」

田辺が部室でいつも一人で何をしているか、なんてとても言えない。

「ちょっとな。天文部って珍しいから、どんなことしてるのかなって思ってたな。邪魔者かな？」

「いえ、別に邪魔者じゃないです。見ての通り、部活じゃなくて勉強ですから」

「偉いな。先生なんてゲームばかりしてたから、お前ちょっと軽蔑するぞ？」

「ひがまないでください」

私も田辺も笑った。田辺の笑顔は久しぶりに見た感じがする。

教師として付き合っ約一ヶ月。私には少しは心を開いてくれたのだろう。

だが、肝心のクラスメートには開いてはないのだろうか。そして、寂しくはないのだろうか。

「先生。せっかく来たのでこれを見てください」
そう言って、田辺は私に星座板を見せてきた。

「これには、それぞれの季節で見ることが出来る星座の大体の位が書かれています。天体観測の時はこれは必需品です。それですね、先生は何座ですか？」

「私はさそり座だ。たしか、今頃が見えるんだよな」

「はい。南側の空の地平線スレスレに現れるんですよ。前の学校ではビルが邪魔で見えなかったけど、この学校に来てからは見えると思うんですよ。」

「まあ、田舎みたいな町だからな」

「それが良いですよ。先生は知っています？さそり座を構成している星でアンタレスっていう一等星があるんです。俺は、アンタレスが南の夜空で一番光って目立ってると思うんですよ。他に、鷲座のアルタイルやおとめ座のスピカとかがあるんですが、俺には一番輝いて見えるんです。やっぱり、自分の星座だからなのでしょうかね」
「お前もさそり座なのか？」

「先生は一応教師ですよ？生徒のプロフィールぐらいは知ってて下さいよ！」

私は驚いた。田辺の生き生きとした表情と、砕けた敬語。その姿は普通の生徒と変わりなかった。

「それにギリシア神話ではさそり座は、オリオン座の元となった、

月の女神アルテミスの……………」

田辺の話は止まらない。

楽しそうに話す田辺。やっぱり、普通の生徒なんだと思う。私が学生の時も、友達と楽しく話していた。時々、つまらない話だったとしても楽しそうに話す振りをしなければならいこともあったが、友達付き合いとしては仕方のないことだった。それでも、会話の楽しみに比べたら微々たるものだったから気にはしなかった。

「……………てことなんですよ。二人とも可哀想ですね。」

田辺の話が終わったようだ。正直、全くわからなかったが、それ以上の成果が得られたから良しとしよう。

「田辺、お前ってけっこう博識なんだな。見た目以上に歩く辞典だな」

「そうですか？俺、けっこう昔から本読んだりしてましたし、さっきのは星座に関する知識なので当然ですよ！」

「もっと俺の博識なところ、しりたいですか？」

「それはおいおい聞かせてもらうよ。」

そう言うと、さっきまで生き生きとしていた田辺の顔が元の顔………つまり、いつもの無表情で冷静で何を考えているかわからない顔に戻った。

しまった、と思った。転校してきてろくに会話していなくて、やっ与会話（しかも自分の好きな話題）出来たのに、『いや、面倒だからイイや』と解釈も取れる返事をしてしまった。

私は教師失格だな。自分の台詞をしっかりと吟味しなければ。

と思いつつも、つい最近まで大学で友達と会話していた時の私の台詞みたいじゃないか。とも思っていた。

「そうですか。仕方ありませんよね」

表情だけではなく、田辺の口調も元に戻ってしまった。

何が『仕方ない』のだろう。私はこの一時の間にいくつもの可能性のある理由を考えた。

自分の専門的な知識に私がついていけなかったからか、それとも、私が興味が無さそうな返事をしてしまったからか、はたまた、ただの口癖なのか。

他にもいろいろ考えたが、今のところはさっきの様な理由が一番しっくりしている。

だが、確実に分かったことは、気分を害したであろうことだ。

「それより、先生、この問題について質問していいですか？」

田辺が出してきた器具を元の場所に綺麗かつ少し急いでいる感じで戻しながら言った。

田辺の一言で『私は教師なんだ』というのを強く再認識させられて、快く質問に応えていった。

だが、別に質問しなくても良さそうなことや、質問している最中に田辺自身が自己完結したりと、ちょっと拍子抜けた時間を過ごした。

それでも教師としての本業を怠ける訳にもいけず、根気強く質問に答えていった。

マグナカルタだの、レコンキスタだの、シェークスピアだの、ルネッサンスだの、勉強に関する知識を教えていった。

その様なことを何回も繰り返している内に、部活動終了を知らせるチャイムが鳴った。

このチャイムが鳴ると、あと二十分で生徒完全下校時間となる。これを守れなかった部活は、一週間部活動停止となるので生徒達は慌て帰り支度をする。

私も、学生だった時は部活に入っていたのでこの辛さは痛いほど分かる。一年の時など、先輩が部室を使わせてくれなかったので、教室に急いで戻って支度をしていた記憶がある。コンチクシヨウ、こんな時間決めんなよ、クソが。いつも友達と不満をたらしていた。

今もその気持ちは変わってはいないが、教師となった今は、そんなことは絶対言ってはならないはずだ。教師は生徒達の手本なのだから。

「田辺、そろそろ帰らないと部活動停止になるぞ」

ちようど一区切りついたところなので、私のとなりに座っている田辺に帰るのを促した。

田辺は肘について聞いていたが、ほんの数分は何もアクションをおこさなかった。

今はわずか数分間でも惜しいはずなのに、何をしているんだ、とも思いう一度言おうとしたところ、ようやくテーブルの上にある勉強道具を片付け始め、バックにいれ始めた。

時計を見ると、校門を出るには十分過ぎる時間が残っていたので一先ずホッと胸をなでおろした。

一分もたたない内に帰り支度が整い、『気を付けて帰れよ』と言いつ帰ろうとしてドアに手をかけた時、田辺に呼びとめられた。

「先生、まだ質問したいことがあるので職員室で教えていただけませんか？」

空は曇り空から、黒の色合いが強い灰色が占める空にかわろうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6950e/>

心の色

2010年10月13日20時50分発行